
品茶に湖畔、秋ふけて

望 月 眞 澄

2001年9月24日から28日まで、わたくしは招かれて中国国家教育部人文社会科学重点研究基地の主催する第2回中古漢語国際学術会議に出席することができた。昨今、中国では各学問分野における重点研究基地を決めることになった模様である。浙江大学では、漢語史研究センターが、全国的にみた漢語史研究の中心として指定されたのである。浙江大学は従来、敦煌学の伝統があり、その中心大学指定にあたっての申請には「敦煌学」を希望したとのことであるが、「敦煌学」は敦煌その地が相応しいだろう。敦煌には昨年行ったが、さすがに現地の圧倒するものは凄い。これは漢字本義の「凄い」である。この秋11月7日特別講演の我が大学の求めに応じて来てくれた張湧泉氏はその伝統の中にある最新鋭である。

さて、今回の学術会議は、この張湧泉氏・主任で六朝語法研究者の方一新氏らが主体となって万般のご苦勞を担ってくれたのである。総参加者83名、学術報告者27名、内日本人4名、欧米人1名。27名を2班に分けて発表と討論をした。これでは

時間が少ない。わたくしは、上述のようにこの敦煌に因縁深い大学であるからにはと考えて、敦煌に関係するテーマを持っていった。従来、敦煌資料に現れる俗字研究の材料としてばかり見てきた『龍龕手鏡』の研究方向にいささかの疑問を抱いていたので、該当資料研究の方向転換を促すつもりであった。総括では、小論も特に取り上げてもらったが、発表に対する評価をすることに疑問を感じる。ひどいものになると、けなされる者もあり気の毒であった。なにか古い官僚主義を嗅ぎ取ってしまった。これは国家がカネを出しているのであるから当然だとでもいうのだろうか。中古漢語もまたいろんな分野がある。音韻・語彙・語法・言語史分期など、会議が一段落したとき女性の院生が駆け寄ってきて「先生から学問へのアドヴァイスを一言」などいわれ、一分くらいで言えるものではない。「先ずは資料をしっかりとってそれを解明して…」などと言っている内に車が晩餐会に出るぞなどと促される。ただし、西湖のほとりの品茶は夜の九時過ぎまで行われ、さすがにお茶

と談義の好きな民族のお国にきたものだと思いつつ、ペーパーだけでは分からない学者の素顔に接することができたのは大収穫であった。香港からの丁邦新教授は研究の高さには敬服していたが、人物もこれまたすてきな愛妻家で、好人物の模範のような方であった。

中国からもにわかにはわかに学術会議へのお誘いが盛んになってきた。この学術会議の前、8月には章太炎記念学術会議からの誘いがあり、もう来年8月石家荘での音韻学会の誘いがある。我々の学生の時代には考えられない隔世の感を深めているこのごろである。
